

## 翻訳修行の冬Ⅱ東江一紀

運命の一瞬というのが、あるものだ。ま、振り返ってみればの話ですけどね。運命と呼ぶのが大げさなら、人生行路上の決定的に不可逆の一地点と言い換えてもいい（もっと大げさか）。

一九七九年二月十七日午前九時ちよいと前のある瞬間、港区芝二丁目、第一京浜の路上の一点に、ぼくの右足と見知らぬライトバンの左前輪とが同時に位置した。次の瞬間、ライトバンは急ブレーキをかけ、ぼくはその斜め前方にはね飛ばされてうずくまっていた。痛みがなく、意識も鮮明だったので、立ち上がろうとしたら、右足に力が入らない。足首の骨が砕けていたのだった。そのまま救急車で病院へ運ばれ、二十七歳にして生まれて初めての入院生活を送ることとなった。

その時点でもう、将来の道筋が大きくかわってしまっていた。当時のぼくは、印刷会社でアルバイトをしながら、かつ通信教育で翻訳を勉強しながら、トレーニングを生活の中心に置くアマチュア陸上競技者だったのだ。

専門は走幅跳で、右足はだいいじな踏切足。

三か月入院し、二度の手術で骨はつながった。退院後もしばらく、未練がましく走ったり跳んだりしていたが、そのせいで足首の関節が変形してしまい、物理的に走れなくなっただけで、ようやくあきらめがついた。

それでもまあ、いよいよ翻訳ひと筋、修行に励もうかと思っているところへ、下訳の口を紹介しようという人が現われた。ほいほいとぼくは乗ってしまいました。下訳というと、なんだかかプロの端くれみたいで通信教育受講生よりはかっこいいではないか。しかしねえ、小学校五年で走幅跳に手を、じやない、足を染めて以来、競技をすべてに優先してきたぼくは、英文科を卒業したことにはなっていないものの、そのときまで原書を一冊も読み通したことがなかった。英語は不慣れ、勉強は大きらい、本を読む習慣はなく、翻訳出版界のことは何も知らんという、まったくもって不埒な翻訳家志望者なのだった。

よくいるんですよ、こういう手合いが。



「翻訳をやってみたいんですけど、翻訳書って読んだことないし、どの出版社からどういう本が出るか、全然知りません」などと平気でいうやつね。今のぼくは、そんな不心得者を見ると、「顔を洗って出直してきなさい」とどなりつけます。本に対する圧倒的な情熱と知識なしに、翻訳家なんか目指すなつての。原書と訳書の別を問わず、とにかく読書量こそがこの商売の資本なのだ！

えー、原稿の途中ですが、わたし、急に顔を洗いたくなったので、ここで中座させていただきます。

（五分ほど空白の時間）

失礼しました。話を戻します。

まあ、そのような状態で、さる翻訳家に弟子入りし、下訳稼業にいそしむ仕儀となった。要するに資本なしに商売を始めてしまったわけ、倒産ははじめから約束されていたようなものだった。しかも、親会社ならぬ「先生」ってのが、いい加減を絵に描いて拡大コピーして3D画像にしたようなおかたでしてね。

つまりは、ろくでもない師匠とろくでもない弟子、足して一ダースでもない師弟コンビが誕生したのだ。

どういい加減かって、その先生、何も教えてくれない。原稿に赤も入れてくれない。それより何より、下訳料を払ってくれない。一応、ペラ（二百字詰め原稿用紙）一枚二百円という約束で、こちらとしては、気楽な独り



身ではあるし、月に五百枚こなせばなんとか食って行けるかなあと胸算用していた。実際には、もつとこなした。ポルノ小説を、締切に追われてひと晩で八十枚訳し、充血しまくったこともありました。締切に追われたのは先生で、訳したのはぼく。充血したのは、武田鉄矢がいた『海綿隊』。

ところが、千枚やっても、二千枚やっ

も、お金がもらえない。入門時にあったわずかな蓄えも、たちまち底をついた。なのに、仕事はどんどん来る。働けば働くほど貧乏になっていく気がした。

貧乏って、不思議ですね。最初は、自分が金がないということがすぐく理不尽に思えて、それに、いつかは金が入ってくるという漠然とした希望があつて、物欲が異様に昂進する。くそーつ、今は買えないけど、あの本とあの本の下訳料がもらえたら、あれを買うぞ、これも買うぞ、とやたら攻撃的な気持ちになるのだ。

それが、何も買えないままに半年ほどたつと、突然、「わたし、な〜んも要らんもんね」と、解脱状態になっている自分に気がつく。いつの間にか、何を見ても、欲しいという気持ちが湧かなくなっているんです。信仰なき即身成仏。

しかし、先生も役者でね。いや、訳者じゃなくて、役者。ときどきぼくを居酒屋に呼び出して、飲ませてくれるのだ。そして、機先を制するように、「お支払いが遅れて、申し訳ありません」などと言う。「月末には、まとまって入りますから」などとも言う。「一枚二百円じゃ苦しいでしょうから、この次から印税折半にしましょう」などとも言う。そ

のたびに、ぼくはころころとだまされる。

そして、とどめ。その居酒屋の勘定を払うときにですね、先生はさりげなく、財布の中身を見せ、釣りを受け取ってから、「わたくしも今はこれだけしかありませんから、とりあえず、あなたと半分ずつ分けましょう」と言つて、二千円か三千円を差し出すんですよ。こりや、押しただくしかないでしょう。

二、三千円あれば、しばらくはだいじょうぶ、とでも思っているのか、一度飲むと、そのあと一か月ほど連絡が途絶える。金もなく、外へ出る気力もないぼくは、ひたすら下訳を続ける。見るに見かねて、大学の陸上部の後輩が、米を一斗差し入れてくれたこともあった。それを炊いて、アジシオかけて食つてました。当時、赤いキャップのアジシオが二十七円。ワンランク上に青いキャップのデラックス・アジシオというのがあつて、三十三円だったのが、それを買うような度胸はとてものなかった。

こんな生活が約二年。仕上げた原稿約八千枚。もらった下訳料、総計十三万五千円。寒々しく、日も差さぬ。まさに、わが翻訳修行、冬の時代であつた。

冬来たりなば春唐辛子、などと申しますが……